

## 古地図の旅

昔から地図をずっと、見ているのが楽しみだ。とりわけ古地図を見ていると、当時の人たちの暮らしぶりに想像を膨らませる。名古屋の丸善などで、古地図の複写が展示販売されていたとき、名古屋や東京、大阪の古地図を買い求めことがある。

写真は上から順に、明治 35 年発行「名古屋新地圖」、大正 4 年発行「名古屋市全圖」、昭和 18 年発行「名古屋市街地圖」。なお、「地図」の「図」は「圖」にあわせた。以下では各地図を「明治」、「大正」、「昭和」と略す。いずれの地図も名古屋城周辺に焦点をあてた。3 回にわたってレポートした『旧軍用地と戦後復興』「名古屋城地区」が、古地図でどう表記されているかを確かめるためだ。

「明治」では、名古屋城離宮の南に歩兵営や練兵場、射的場、北には陸軍省用地などが広がる。東には撞木、白壁、柳原など現在につながる町名も多く見られる。

「大正」もそれほど変化はないが、北の陸軍省用地が練兵場に、その南にも練兵場が。第三連隊司令部や被服庫や軍楽隊や病院など、軍用地名が具体的に記されている。

「昭和」では表記が一変する。名古屋城地区のすべてが空白になっている。「大正」で兵器支廠や陸軍省用地となっていた千種地区も同様。地図にはないが、熱田兵器製造所なども空白になっている。昭和 18 年というと、太平洋戦争も始まり、軍事機密として地図も扱われていた。天気予報などとともに、地図も戦争の時代の影響を強く受けていたことが分かる。

「昭和」の地図は、現在につながる街の様子、戦災復興事業などによる街の変化も読みとれる。「大正」では今池や廣見池があったが、「昭和」では学校などに代わっている。桜山周辺では、現在の名古屋市大病院と昭和郵便局あたりが高等商業学校、博物館が市民病院となっている。「昭和」をじっくり見ていて、はじめて気がついたことがある。瑞穂競技場のあたりに、鼎池という大きな池があった。古地図の旅からの新たな発見だ。



(2017 年 9 月 13 日)